

対比を実感させて筆者の主張を読み取らせたい

## 六上「生き物はつながりの中に」(中村桂子)



17年度版「国語」六上 「生き物はつながりの中に」

一 自分という存在について考える  
 わたしたちは、自分を「生き物」である意識することがどれくらいあるだろうか。さらに、「生き物」である意識することにはどんな意味があるかについてまで考えることは少ないのではないだろうか。そのような日常の中で、子どもたちが、自分が「生き物」であることを改めて意識し、「生き物」とはなんなのかを知ることは、友達や家族との関係、そして食生活など、身近な問題について考えさせるために大変重要なことである。そして、そこで考えたことは、環境問題など、地球上に生きるすべての生き物と共存していくために人間として考えなければならない大切な課題につながってくると思われる。

筆者がこの教材を通して読者に語りかけている内容は、この時期に教師も子どもたちといっしょに読み深め、考えていきたいことである。

二 対比事例に視点を当てる  
 「生き物はつながりの中に」では、筆者は

対照的な二つの事物を対比しながら論を進めている。作品の中に対比事例を取り入れながら物事を説明するという叙述のしかたは、何かを主張しようとする時に効果的である。この場合、対比事例が巧みであるほどわかりやすい文章になるし、読み手に対して効果的である。読む側からすれば、使われている対比事例が妥当なものかどうかを検証しながら物事の本質をとらえる読み方を身につけておくことは、筆者の主張を理解するうえで大変重要であるといえる。

この作品では、「犬」と「大型ロボット」を対比させながら、「生き物」の特徴を押しさえよつとしている。そのうえで、「生き物」としての人間を、外界との「つながり」という側面と、生命の歴史という「つながり」の側面からとらえ、「かけがえのない一人」としての「人」の存在について考えさせようとしている。

三 対比を実感するために  
 この単元では、以下のような力をつけていきたい。

・対比事項を「相違」「共通」という観点でまとめ、筆者が何を主張したいか読み取る。  
 ・筆者の意図に沿って文章を要約し、それに対する自分の考えをまとめる。  
 本文では、前述したとおり、「つながり」という言葉に基づいた「対比」を核にして、論を展開している。そこで、「この学習に」「このような対比」が「筆者のどんな主張」に結び付くかを理解するための具体的な学習活動を取り入れてみてはどうかと考えている。つまり、「つながり」とは違う課題に基づいて、対比の有り様を実感し、そのことがどのような主張に結び付くかを体験させようとしているのである。

では、具体的にどのようにつなげるかという点である。「この」では、本文に従い、「犬」と「大型ロボット」との対比を「現代の人間生活にどちらが役立つか」という課題で論争させることを想定してみよう。いわゆる「犬猫論争」である。「相違点」を強調するところは、それぞれの現代生活に

生きつる特性を見いだすことにつながるし、「共通点」を強調することは、「現代の人間生活」に欠落している点や求められている点を明らかにすることにつながるであろう。また、「犬」も「大型ロボット」も「人」の存在にとっては「他」であるということも認識できるであろう。

もともと、「対比」には「この」のような幅広さが存在するのである。「この」したことを知ったうえで、筆者は「つながり」に視点を当てた論の展開をしているのである。叙述のしかたが、それぞれの特性の押さえ(視野の広い部分)から生き物の本質(論の核)へと展開していくのも妥当なところである。

このようにした経験を読みの中にも位置づけ、もう一度本文に立ち帰って筆者の主張を読むことが、「対比事例」を実感をもって読むことにつながる。わたしは考えている。さらに、本文中の「他」の意味する内容も「生き物」だけにとどまらず、「社会生活を行う人」に対しての「他」として考え直すことを可能にする。わたしは「とらえて」。